左上）器は10客ずつ。作家物や古いものが中心。右）リビングの窓の向こうはデッキテラス。左下右）子ども部屋のリビング。左下左）自宅全景。左側に工房が建つ

赤木智子さん

頭でなく心や体が心地いいことを

能登半島の山深い24軒の集落に赤木智子さんと漆芸作家の明登さんが住まいと工房を構えたのは、16年前のことです。

ギャラリー勤めを辞め、漆職人を目指す明登さんと東京から輪島に移住。修業を経て5年後に独立し、智子さんはいきなり塗師屋（漆器の製造から販売まで行う家）のおかみさんになったのでした。以来、毎日、赤木家にはいろんな人が出入りしています。

「いまは長女が進学で上京していますが、高校生の長男と小学生の二女、犬1匹の家族に弟子が6人。取材や打ち合わせに来た人、友人・知人、毎日わいわい、いつも、だれか他人がいる家なんです」

最近でこそ、器の勉強のため、お弟子さんも料理当番をするようになったけれど、長い間、ごはんは彼女ひとりの担当でした。「ひとりの時間なんてありませんよ」といいながらも、少しも苦じゃなさそうな智子さん。華奢な体でにこにこ朗らかな笑顔が魅力的です。

「東京で働いていたころは20代で、ばりばりやって、人と比べたり、認めてもらいたいと思っていたけれど、こっちで暮らしていると、そういう欲がぼろぼろなくなっちゃった。ギャラリーでいろんなことがわかった気持ちになっていたけど、小さな渦巻きの中のことと気づきました。そのうち〝こういう仕事をしている人〟ではなく、〝こういう暮らしをしている人〟になりたいと思うようになりました」

それはたとえば、あふれる情報も、電化製品など便利なものもなかったころの農家のおばあさんの暮らし。自分の手でできることは手でするという、シンプルでたくましい暮らしのルールです。

「そのなかで、本当に気持ちのいいことや物を選ぶのが、私のテーマみたいになってきました」

赤木家は、山の水を引いていて、直接、生活排水を下水道に流しています。だから食器洗い洗剤も使わず、たわしと和太布でごしごし。シャンプーや洗濯石けんも環境に配慮したものを選んでいます。けれど、「地球のためとかエコとか思うと続かない」と智子さん。

「山からもらった水を汚して川に戻したくないなあ、って思うからやっているだけなんです。頭で考えることは続かないから、心や体が気持ちいいことをする。暮らしは毎日のことだから、まず自分が心地よくないとね」

もの選びも暮らし方も、肩肘張らない自然体。これもまた能登の大地にたゆたう時間から、学んだことなのでしょう。

あかぎ・ともこ
'62年、東京生まれ。ギャラリーに勤務後、編集者の赤木明登氏と結婚。'89年、夫の修業のため輪島へ移住。'94年、明登氏が独立。1男2女の母。著書に『ぬりものとゴハン』（講談社）。

12時きっかりからキッチンに立つ智子さん。今日は、お弟子さんと取材スタッフ合わせて11名の昼ごはんを1時間でつくる予定。シンク前の窓には山の木々や緑がいっぱいに広がる。お気に入りの場所

赤木智子さんの7カ条

1 ごはんはみんなで食べる

お弟子さん6人に取材スタッフや友達など来客が絶えない赤木家のお昼は、いつもにぎやか。夜は夜で、お酒が大好きな夫妻の家には、さまざまな職種の人たちが集まり、飲んだり歌ったり。ときにはヨーガン・レールさんや友達の作家さんまで手料理を楽しみにきます。そこに長男・茅くん、二女の音ちゃんも交じるので、赤木家の食器やグラスは10客単位というのも納得。

「いつもだれか他人が家にいる状態で、お茶を出したり、ごはんをつくったり。でも、それが楽しいの。一緒に食べながら、子どもにいろんな生き方をしている大人がいるんだなあとわかってもらえたら、それが私がしてあげられる唯一の親らしい仕事かもしれません」と智子さん。大きな食卓は赤木家の象徴です。

昼食時。右列中央が夫で漆芸作家の明登さん。ほかは、お弟子さん

2 山のなかでもおしゃれを忘れない

「山のなかに暮らしているからこそ、おしゃれをしたり身ぎれいでいたりすることを忘れたくないのです」と智子さんはきっぱり。その理由をこう語ります。

「ともすると、田舎の暮らしって、作務衣とかもんぺのイメージでしょう？　でも一番大事なのは、自分たちが気持ちよく暮らすこと。もんぺが気持ちよければそれでいいのです。私は、東京で暮らしていたころに心地いいと思っていたものを田舎に行ったからといって変えたくなかっただけ。それに、とにかく来客が多いから、ふだんから気をつけていないと、そのたびに掃除や化粧をする時間がないの」

根がぐうたらなので、と智子さんは照れたように笑いました。スリッパひとつ、エプロンひとつも選び抜いた好きなデザインで。心地よさを追求した智子さんらしい暮らしのルールです。

3 いつでも鉄瓶で湯を沸かし、おいしいお茶を淹れる

「朝、起きたら、まず釜定の南部鉄瓶にたっぷりのお湯を沸かします」。小学校のスクールバスが7時に迎えにくるので、それまでに朝食を済ませなければいけません。朝は大忙しですが、それでもスイッチひとつで沸騰する電気ポットは苦手だそう。

「うちは山から水を引いているのですが、鉄瓶で沸かすとお湯がやわらかく、さらにおいしくなります。沸かしている間に洗い物もできますから時間は気にならない。昔は電気ポットもなかったんですものね。なかった時代はどうしていたかな、と考えるのも好きなんです」

寒い日は、ゆず茶、朝食がパンなら大好きなミルクティー、一年中飲んでいる加賀棒茶。鉄瓶のまろやかなお湯で、朝からおいしい一杯をいただきます。

4 自分のために時間をつくる

これ、3児の母であり、お弟子さんを抱える工房のおかみさんとしては、実はかなり難しい願い。長女が東京の大学でひとり暮らしを始め、長男が高校生、二女が小学生と、子育てが一段落した最近、ようやく自分の時間をつくることができるようになったそう。

そこで始めたのがお茶を習うこと。仲間を集め、武者小路流千家の先生に出稽古をお願いしています。智子さんは目を輝かせていています。

「月に2度、隣の七尾市へ2時から5時まで、夫と和服を着て習いにいきます。夫はもともとお茶の心得があり、私もいつかは、と思っていました。始めてみると、これが面白くて！　すべてが理にかなった奥の深いお茶の世界にしびれています」

お茶のために時間をつくり、着付けをして出かけてゆく。稽古に行くまでの間も、大事な自分時間です。

会津木綿の着物にアンティークの帯

5 使い捨てではない気に入った道具を少なく持つ

常時10名近いごはんをつくっている台所にしては、器も鍋も調理道具も少なめなのが印象的です。シンクには野田琺瑯の丸形洗い桶がひとつ。三角コーナーはなく、生ごみは小さな容器に入れて有機肥料にします。

「人んちより、お玉やレードル、お鍋も少ないかもしれませんね。そんなにそろえなくても大丈夫だと思うんです。大は小を兼ねるし、この野田琺瑯の洗い桶も、お鍋にもなるんですよ。私も物が好きだからつい買ってしまうけど、毎日、見るものが美しくなかったり、かわいくなかったりすると哀しいので本当に気に入ったものを最低限持つように心がけています」

器なら、しまうのではなく使うものだけを持つ。プラスチックなど美しいと思えないものは潔く持たない。すべては長く使えることが基準。物が好きだからこそのこれらのルールも、「ふだん意識したことなくて、気づいたらこうなっていました」。

洗い桶は野田琺瑯。上の取っ手付き容器は生ごみ入れ

6 自分の畑でつくった野菜、近くでとれたものを食べる

明登さんの修業時代、家計の足しにと、自分たちで食べられる野菜をつくってきたおふたり。東京育ちで農業の手伝いの経験がない智子さんは、見よう見まねで土から畑をつくりました。

自宅脇の畑では、いまや、大根、かぶ、白菜、キャベツ、じゃがいも、さつまいも、レタスやルッコラ、ほうれんそうなどが季節ごとに収穫できるほどに。しいたけ栽培もしています。

土付きの野菜は畑から1分で赤木家のキッチンへ。フレッシュな野菜が毎日たっぷり食卓にのぼることの、なんとぜいたくでありがたいこと。けれど、智子さんはいいます。

「体にいいからとかいう理由だと続かない。おいしいし、楽しいから続いているんだと思います、何事も」

今日のお昼に使いましょう、と脇の畑で大根を収穫

リビングの前に張り出したデッキテラスは赤木家の特等席

7 空や雲や月や星や山を見上げる

夏は玄関もデッキテラスも家中の窓も開けっ放しだといいます。デッキの前は林。木立が朝夕違った表情を見せてくれます。

リビングの天窓を指さして智子さんは教えてくれました。

「夕方6時か7時ころ、あそこから月が見えるんです。それはきれいでね、見るたび、ほっと心が安らぎます」

朝起きて、湯を沸かしながら。夕方は料理をしながら。夜は、お酒を飲みながら家族や友達と。何度も空を見上げます。

智子さんは、リビングから山の緑を見つめながらいいます。

「人さまにいえるようなルールなんてないのだけれど、私の場合、頭で考えることは続かないから、心や体が気持ちいいことをする。それが最大のルールといえばルールでしょうか」